

マルコによる福音書 16 章 1 節～8 節

2019 年 5 月 23 日

古本 靖久

1、聖歌 169 番 「主の復活 ハレルヤ」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 97 ページ）

4、テキストの位置

5 年間かけておこなってきたマルコによる福音書の学びも、いよいよ今回が最終回です。

と言うと、少し変だなと感じるかもしれません。というのもわたしたちが普段使っている聖書には、結び一（9～20 節）と結び二（節表記なし）があるからです。

エルサレムにて	金曜日	15:1-5	ピラトの尋問
		15:6-15	バラバとイエス
		15:16-20	兵士の嘲弄
		15:21-32	十字架
		15:33-41	死
		15:42-47	墓
	日曜日	16:1-8	復活
		16:9～	加筆

しかしよく見ると、それらの箇所は〔 〕で囲まれています。現在これらの部分は、2 世紀～3 世紀ごろの加筆だと考えられています。ではなぜそのような加筆がされたのでしょうか。またマルコによる福音書はわたしたちに、イエス様の復活をどのように伝えたかったのでしょうか。

5、節ごとに

◆復活

16:1 （そして）安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、（行って）イエス（彼）に油を塗（る）身に行くために香料を買った。

イエス様の十字架は金曜日の出来事でした。金曜日の日没から安息日に入るため、日没以降は買い物をする事ができません。そこで安息日が終わった土曜日の夜、日没後すぐに、彼女たちは香料を買いに行きました。

16:2 そして、週の初めの日の朝（す）ごく早く、日が出ると（彼女たちは）すぐ墓に行った。

埋葬後三日間、近親者が墓を訪ねる習慣が、当時はあったようです。その期間、遺体が腐敗しないように、埋葬時には遺体に油を塗っていました。しかし安息日に入る前に急いで葬られたイエス様の体には、油は塗られていませんでした。

すでに一日半経ってしまった遺体に、今さら油を塗るということは、常識的には考えにくいことです。しかしそれほど彼女たちは、イエス様に敬意を示し、自分たちのできることをしたいという気持ちを強く持っていたのでしょう。

16:3 （そして）彼女たちは、「だれ（か）が（わたしたちのために）墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っ（互いに言っ）ていた。

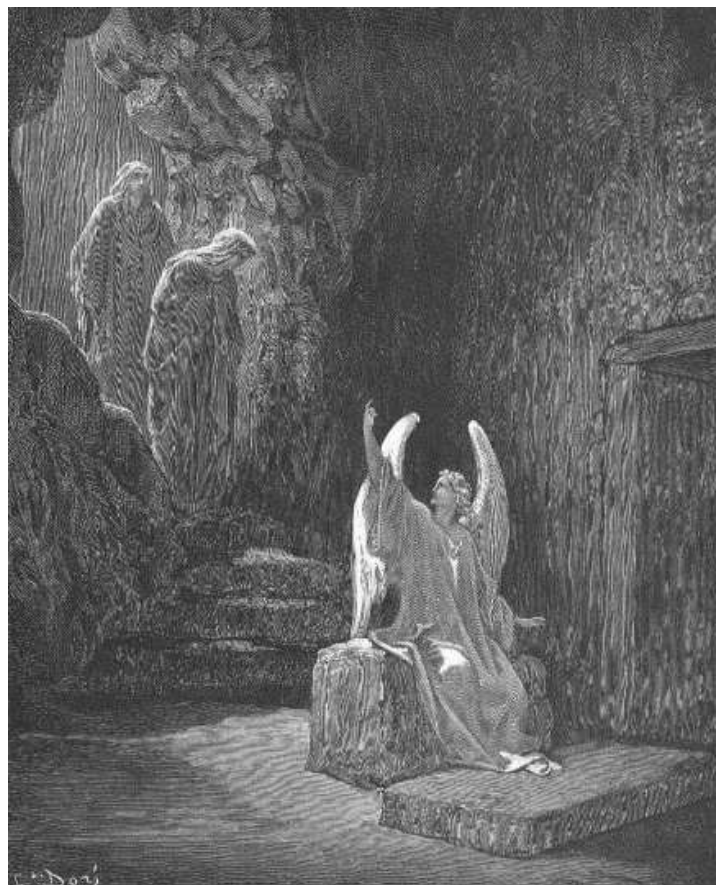
彼女たちは、イエス様が墓に葬られる様子を見ていました。そしてその入り口にあった大きな石のことも覚えていました。

自分たちだけでは動かせるはずもない石があるのを知っていながら、三人だけで出掛けるのは傍から見たら愚かなことかもしれません。しかし彼女たちは居ても立っても居られず、日が昇るや否や、墓へと向かったのです。

16:4 ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転が（され）てあった。石は非常に大きかったのである。

石は転がされていました。この「～される」という言い方ですが、原語のギリシア語では「神的受動態」という特別な用法が使われています。この用法は、行為される方が神さまである場合に用いられます。つまりこの大きな石を動かしたのは、他でもない神さまなのです。

そして、石が非常に大きかったという報告もここには付け加えられます。このことによって、この奇跡がさらに際立ちます。



16:5 (そして) 墓の中に入ると、白い長い衣を着た(まとった)若者が右手(側)に座っているのが見えたので、婦人(彼女)たちはひどく驚いた。

そこにいたのは若者でした。彼は白い長い衣をまとっています。「白い」という語は「輝く」とも訳されます。衣や顔が輝くのは、天的な存在のしるしです。

また女性たちの驚く様子からも、この若者が普通の人間ではないことがわかります。彼は彼女たちに驚くべきことを伝えます。

16:6 (すると) 若者(彼)は(彼女たちに)言った(う)。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方(彼)は復活なさせて、ここにはおられない。御覧なさい(見よ)。(彼を)お納めした場所である。

「驚くことはない」と若者は言います。受胎告知のときにマリアに「恐れることはない」といった天使ガブリエルの言葉を思い出します。

イエス様が復活された朝、墓に真っ先に行ったのは女性たちでした。このことは、どの福音書も共通しています。しかし当時、女性の証言だけでは不十分だと考える人も多くいたようです。それぞれの福音書は、彼女たちが間違いなくイエス様の葬られた墓に行ったことを補足します。



ルカ福音書とヨハネ福音書は、ペトロ(ヨハネではもう一人の弟子と共に)が彼女たちの言葉を聞いて墓に向かったと書きます。またマタイ福音書は、番兵が墓の前を見張っていたと言います。そしてマルコ福音書は若者が、ここは「十字架につけられたナザレのイエス」を「お納めした場所」であると、はっきりと伝えます。

イエス様は三度、受難予告をされました。その内容は「苦しみを受け、排斥されて殺され、三日後に復活することになっている」というものでした。その言葉を弟子たちも、彼女たちも信じていなかったのでしょうか。

ここでの「復活なさせて」も神적受動態です。受難予告の「～ことになっている」にも神さまの意志をあらわす動詞が用いられています。つまり、すべては神さまのご計画です。その出来事が、女性たちの目の前で起こったのです。

16:7 さあ、行って、(彼の) 弟子たちとペトロに告げ(言い)なさい。『あの方(彼)は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて(あなたがたに)言われ(てい)たとおり、そこでお目にかかれる(彼に出会えるだろう)』と。」

マルコ福音書は、イエス様とガリラヤで出会うことができるという若者の言葉を載せます。復活のイエス様とは、どこで誰が出会ったのでしょうか。マルコ福音書以外の記述をまとめてみました。

マタイ	ルカ	ヨハネ
婦人たち(墓の前) 28:9~10	二人の弟子(エマオ) 24:13~32	マグダラのマリア(墓の前) 20:11~18
弟子たち(ガリラヤ) 28:16~20	ペトロ(エルサレム) 24:33~34	弟子たち(エルサレム) 20:19~23
	弟子たち(エルサレム) 24:36~49	トマス(エルサレム) 20:24~29
		7人の弟子(ガリラヤ) 21:1~14

イエス様が十字架につけられ、墓に葬られたのはエルサレム郊外でした。復活されたイエス様が、まずエルサレムに隠れていた弟子たちにあられたというのは、自然なことに思います。しかしマルコで大事にされているのは、「ガリラヤで出会える」ということです。

マルコによる福音書には、ガリラヤで活動するイエス様の姿が生き生きと描かれていました。ガリラヤには、彼らの日常がありました。そしてイエス様を必要としている人たちが多くいました。

イエス様は、エルサレムのような宗教や政治の中心地で君臨するような方ではないのです。人々の間に立ち、共に涙を流し、寄り添いながら歩まれる方です。それが「ガリラヤ」という地名のもつ意味です。

そして、この言葉が弟子たちとペトロに語られたということにも注目したいと思います。ペトロは「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」とイエス様に誓っていながら、三度もイエス様のことを「知らない」と言いました。他の弟子たちも、イエス様を見捨てて逃げてしまいました。

しかしイエス様は、彼らを見捨てません。たとえご自分が見捨てられようとも、イエス様は彼らをガリラヤへと招かれるのです。弟子たちはイエス様によって赦されています。イエス様の十字架が終わりではないのです。

16:8 (そして) 婦人(彼女)たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

復活日の朝、教会では「おめでとう」という言葉が交わされます。ところがこの場面を見る限り、喜びの場面とは程遠いことがわかります。

彼女たちは「震え上がり、正気を失っていた」とあります。この言葉の本来の意味は、「震えと自失が襲い掛かって来て、彼女たちを捕まえた」となります。暗闇が突然襲ってきて、目の前が真っ暗になるようなものでしょうか。

復活の出来事が「恐れと自失」だけではおかしいと思ったのでしょうか。マタイ福音書ではここが「恐れながらも大いに喜び」と変わり、ルカ福音書にはこの記述自体が削除されています。しかし事実、復活の出来事は恐れでしかなかったのです。

マルコによる福音書はここで終わります。イエス様の死と復活の記述だけで、復活のイエス様との出会いは一切書かれていません。しかしこのように唐突に福音書が終わることによって、イエス様の復活とはわたしたちの想像をはるかに超えるものであることを伝えようとしているのかもしれない。

<9 節以下について>

冒頭で、9 節よりあとの部分は、後代になって書き加えられたのだと書きました。そのように考えられる理由は、二つあります。一つは、古く有力な写本に 9 節以下がないということ。そしてもう一つは、使われている語句や文法が変わっていて、同じ人が書いたとは思えないということです。

ではなぜ、後代になって 9 節以下が書き加えられたのでしょうか。それは 16 章 8 節までで終わってしまったら、復活のイエス様との出会いが語られないことになるからです。

マルコ福音書より後に編集された他の福音書には、独自の復活物語が書かれていきました。ペトロをはじめとする弟子たちや女性たちが、復活のイエス様に出会ったという物語には、とてもインパクトがあります。それは復活節に語られる物語や説教を思い返しても、よくわかります。

そしてマルコ福音書が広まっていく中で、復活のイエス様の話がないと不十分だと考えた人たちが、他の福音書に書かれていた伝承を元に、2~3 世紀ごろに写本に書き加えた。それが 9 節以下の記事であると考えられています。

<今日の箇所から>

① 具体的な復活物語は語られなかった

イエス様の復活というと、扉の鍵を閉めている部屋の真ん中に現われる、疑うトマスに現われる、マグダラのマリアに現われ「おはよう」と言う、舟の右側に網を打ちなさいと言われる、魚をむしゃむしゃ食べる、エマオへの途上で出会うなど、たくさん思い浮かびます。

しかしマルコによる福音書には、それらの物語は載せられませんでした。それはなぜでしょうか。その伝承の存在を知らなかったのでしょうか。

それは復活のイエス様との出会いは、人それぞれ違うからだと思います。「このようにイエス様は来られる」ということはないのです。わたしたちの思いを超えて、出会えるのです。

② ガリラヤで出会える

イエス様は宗教の中心地エルサレムではなく、人々の日常であるガリラヤに来て下さいます。それは、わたしたちにとっても喜ばしい約束です。

わたしたちにとって、ガリラヤとはどのような場所でしょうか。エルサレムというと少し敷居の高い、頑張らないといけない場所のようなイメージがあります。しかしガリラヤは、人々の生活そのものです。イエス様は、わたしたちの悲しみや苦しみの中にも、そして喜びの中にも来てくださるのです。

③ 弟子たちに対するイエス様の愛

イエス様は十字架の下や墓にまで従った女性たちだけではなく、イエス様を見捨て、裏切り、逃げて行った弟子たちさえも招かれます。完全な人間だけが招かれるのではありません。

わたしたちはどうでしょうか。福音書を通して、わたしたちは弟子たちと同じようなところがあると、感じたことはなかったでしょうか。ユダのように裏切り、ペトロのように否認し、ヤコブとヨハネのように偉くなりたいと思ったことはありませんか。イエス様は、弱さの中から抜け出せない一人一人にも声を掛け、導いてくださるのです。

今回の学びはこれで終わります。次回は7月24日(水)10時半からです。ガラテヤ書①「著者パウロ」について学んでいきます。